

京都大学教育研究振興財団助成事業 成 果 報 告 書

平成 27年3月31日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 白眉センター

職 名・学 年 特定助教

氏 名 川 名 雄 一 郎

助 成 の 種 類	平成26年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 研究成果物刊行助成			
研 究 成 果 物 名	徳・商業・文明社会			
著者・編著、作成者全員の所属・職・氏名	京都大学白眉センター特定助教・川名雄一郎、慶応義塾大学経済学部教授・坂本達哉、名古屋大学経済学研究科教授・長尾伸一、ジョンス・ホプキンス大学名誉教授・J・G・A・ポーコック、大月市立短期大学経済科教授・伊藤誠一郎、尾道市立大学経済情報学部講師・林直樹、兵庫県立大学名誉教授・生越利昭、京都大学経済学研究科経済資料センタージュニアリサーチャー・門田樹子、下関市立大学経済学部教授・米田昇平、東北大学法学研究科教授・犬塚元、関西学院大学名誉教授・篠原久、京都学園大学経済学部教授・渡辺恵一、東京大学経済学研究科講師・野原慎司、大阪商業大学経済学部准教授・森岡邦泰、関西大学経済学部教授・中澤信彦、岡山大学社会文化科学研究科教授・小田川大典、東洋大学経済学部准教授・太子堂正称、関西大学非常勤講師・村井明彦、慶応義塾大学経済学部教授・穂苅亨、愛知学院大学経済学部教授・田中秀夫			
学術書・論文集等について	出版社・印刷会社等名	発行年月日	配 布 先	
	京都大学学術出版会	2015年3月31日	関連分野の研究者、大学等高等教育機関の図書館、一般販売	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。合わせて、刊行・作成された研究成果物をご提出(ご提示)下さい。			
会 計 報 告	事業に要した経費総額	2,857,896 円		
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円		
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称)		
	経 費 の 内 訳 と 助 成 金 の 使 途 に つ い て			
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)	
	組版代	1,176,000	500,000	
	製版代	438,400	200,000	
	刷版代	186,000	100,000	
	印刷代	312,200	100,000	
	用紙代	213,600	100,000	
製本代	320,000	100,000		
消費税	211,696	100,000		
合 計	2,857,896	1,000,000		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 本成果物は専門性が高く、出版助成がなければ出版は困難でしたが、学際的な内容・アプローチのものであるために科研費などのその他の公的出版助成には馴染みにくいものでした。その意味で、本成果物の公刊には貴財団による助成が不可欠でした。また、本書の編集の過程で内容や構成についていくつか変更が生じましたが、貴財団の助成はこのような点について、柔軟に対応できるものとなっており、最終的に最も良い形にまとめることができました。助成いただいたことに深く感謝しています。			

本書は、古代から綿々と論じられてきた「徳」と近代の現実である「商業」が緊張をはらみつつ複雑に交錯しながら成立し拡大していった「文明社会」をテーマに、これらに関連する理論を組み立てた近代ヨーロッパの思想家の営みを、ジョン・ポーコックらによって刷新された20世紀後半の思想史研究の成果を踏まえつつ、テキストとコンテクストの相互作用に着目しながら論じており、近代ヨーロッパの多様で豊かな思想世界を社会思想、政治思想、経済思想などのさまざまな側面から描き出すことを試みたものである。

第1章は17世紀の貨幣、銀行、信用論争と、従来から経済思想史で取り上げられてきた利子論論争の実態を分析した。第2章は、18世紀初頭のジョン・ローの信用論の意義を、それに対するダニエル・デフォーの批判と対比しながら論じた。第3章は「初期啓蒙」や「保守的啓蒙」とも呼ばれてきた17世紀末から18世紀初頭にかけてのイングランド思想を、中心人物であるジョン・ロックの思想を分析した。第4章では盛期啓蒙思想と自然法学の伝統とのかかわりが、プーフENDORFにおける社交性と自愛心を分析した。第5章では18世紀初頭の啓蒙主義者サン＝ピエールの思想をアウグスティヌス主義とそこからの離脱という視点から解明することが試みられた。第6章は「文明社会論」という文脈の起源を取り上げた。第7章は唯名論とアダム・スミスとの方法論的なかかわりを、第8章は進歩主義の経済学的な論証とされるスミス『国富論』における歴史記述を、第9章はスミスの「見えざる手」の観念の起源を、それぞれ論じている。第10章ではプーフENDORFとルソーとの比較から自然法学とルソーの共通性を探っている。第11章ではフランス革命に対するマルサスの対応を分析した。第12章では功利主義と共和主義のかかわりをベンサムのアメリカ理解を中心に扱った。第13章ではロマン主義の巨頭コールリッジのテキスト読解をめぐる論争を検討した。第14章と第15章では現代自由主義の思想家であるF.A.ハイエクと自由主義者アイン・ランドをそれぞれ取り上げている。最後の第16章は、現代経済学の基本的な手法であるゲーム論を使用して、スミスの「公平な観察者」を理論的に再構成しようとする試みを紹介する。

本書は17世紀から19世紀初頭にかけての社会思想、政治思想、経済思想を扱いながら、現代の支配的イデオロギーである自由主義や民主主義と異なる、徳と商業が交錯していた近代ヨーロッパ文明社会の思想世界を描き出している。本書が対象としたテキストが書かれたのは、個人の間信頼に基づきながら、自分自身を大切に、自分の能力を発揮しようとする意欲、それを支える実際に即した世界の理解などを重視して、それらを可能にし、保証し、発展させるための制度や法や国家のあり方が探究された時代だった。それは工業化、民主化や科学主義によって特徴づけられた19世紀以後の世界とは大きく異なっていた。この時代には身分と階級が存在し、政治的民主主義はなく、王権の絶対性の観念もまだ生きていた。知識人も含め、大半の人々が何らかの形で神を信じ、そこに最後の拠り所を求めていた。科学的知識は信頼され、ますます重視されていったが、それには常に限界があると考えられた。「古代」の理念や「中世」の学問も批判を受けつつ、形を変えながら継承され生産的な役割を果たしていた。人間の物質的な豊かさは倫理的成長の基礎であると考えられ、人間は道徳的存在としての完成に

近づいていくべき使命を持っていた。このような考え方は、一見すると、現代とはまったく異質のように思われるが、現代の多くの思想がそこに起源を持っていたことも否定できない。本書が扱った多彩な思想家たちは「徳・商業・文明社会」というテーマに関連する諸問題をそれぞれの視点から理解しようとした。そうした努力の中から、現代世界の骨格となる諸観念が徐々に現れてきたということができるだろう。この時代に論じられていた諸問題には現代がいまだ未解決のものも多くあり、本書が分析の対象とした近代ヨーロッパ思想は、現代のあり方を深く知るとともに、その彼方を展望することにも役立つだろう。